

シラカバなどの点在する放牧草原であり、ヒメスゲ、コキンバイ、ギョウジャニンニクなどと混生していた。御教示をいただいた菊地政雄先生に御礼申しあげる。

(岩手大学教育学部生物学教室 島山茂雄)

○サツキヒナノウスツボ *Scrophularia musashiensis* Bonati. 先頃、下伊那教育会所蔵の奥原弘人氏の標本をみせていただいた所、サツキヒナノウスツボの標本が 1 枚あった。採集地は下伊那郡市田村不動滝の上流で、ほぼ  $137^{\circ}50'E$ .  $35^{\circ}35'N$  に位置し、標高 1150m 位である。開花中のものである。下伊那郡下でも木曽山脈の東側に存在することがわかった。山崎敬氏(本誌 37: 271)が上伊那地方で最も南の産地としてあげた飯島村与田切川より 12km 程南である。

(飯田市立飯田西中学校 浅野一男)

□矢頭献一・岩田利治：図説 樹木学—落葉広葉樹編 K. Yatoh and T. Iwata: [Illustrated Dendrology—Broad-leaved deciduous Trees (of Japan)] pp. 216, pls. 213, figs. 82 朝倉書店 ¥1,000 28 科にわたって、約 46 属、112 種、その他の変・品種が解説されている。特に樹冠、樹皮、冬芽の状態および葉脈の細部の図写真を多く伴う。著者らはこの著で、前の針葉樹、常緑広葉樹と共に 3 篇で図説樹木学 3 巻を完成した。一般の植物分類学者は樹皮、樹冠の特長に弱い。また、冬芽の標本を集めることも少い。これらの弱点を見事についた書で、教わることが多いと思われる。樹木学の立場から有用樹種に傾いているので、ヤナギ属にはただの 3 種、アカメヤナギ、シロヤナギ、バッコヤナギがあり、カエデ属 23 種の解説も短い。また、*Rhus*, *Parabenzoin*, *Lindera*, *Pourthiaea*, *Sirakia*, *Euonymus*, *Rhamnus*, *Firmiana*, *Acanthopanax*, *Syringa*, *Callicarpa* の諸属の小高木はふくまれていない。

著者によると、ブナ、ミズナラを主とするコナラ属、カバノキ属の諸種の日本における蓄積はもっとも多く、それぞれ、 $1.7 \times 10^8$ ,  $1.0 \times 10^8$ ,  $0.4 \times 10^8$  m<sup>3</sup> である由。概説は僅かに 3 頁に過ぎないが、落葉広葉樹の概念がよく判る。

More than 112 spp. of important trees growing naturally in Japan are explained all in Japanese with the exception of their scientific names, including the diagnostic characters also of the canopy, bark, and winter bud.

(T. Tuyama)

□菊地秀夫：江戸東京地名事典。pp. 1-340, 昭和 40 年 10 月、雪華堂(東京) ¥1,500 東京の主要な地名、約 1600 項目について歴史的な変遷などを解説した。古地図類(シーボルトの江戸鳥瞰図をふくむ)、錦絵、名所江戸百景の一部分なども出ていて、別に索引、文献集がある。植物の分類学を国民的立場から解明する場合にはこのような地名辞典の必要なのは勿論であるが、特に東京のように、街区の名称が幾変遷もした所では重要である。非常によく調べた力作であるが、身近の所を見ると不足の点も少々ある。例えば小日向台(文京区)の頃には江戸氏の家来として豊島氏と共に有名な小日向氏のことに触れていない。また、元富士町は富士社(駒込)の元地にちなんだもの

で、元地は赤門（東大）を入れて右の小丘と説明されているが、この小丘は「椿山」と通称されたもので、すでに昭和 40 年秋に取り払われてしまい、真の元地ではなく、同大図書館のあたりにあった螺山（サザエヤマ）がそれである。忍が岡（本郷）は、元ここにあった柳原氏の屋敷が駒込に移ったために、元地をしのんで命名されたものともいう。この書にもっともほしかったのは、江子っ子本来の呼び名で、秋葉っ原（パラ）、本所（ホンジョウ——本庄）など今日、多くは忘れられかけている地名である。（津山 尚）

□W. Meijer: **Plant life on Mount Kinabalu** pp. 2, unnumbered 22 pl. Forest Department, 1966. Sabah, Nornes; & **A Botanical guide to the flora of Mount Kinabalu** pp. 39. repr. Symp. Ecolog. Res. Humid Trop. Veg. Kuchin, Sarawak. 1963. 前者はガイドブックに過ぎないが 135 種のシダ、顕花植物が中国人 Yap Pak Hau 嬢で活写されていて興味が深い。後者は Kinabalu の植物研究の歴史を述べ、地質、気候、植物帯の区別、マレーシアの中での植物地理、主な科別の植物の説明（実に多くの種を列挙している。）、*Rhododendron* spp. および var. 18 への Key. 地図 1 枚、風景・植物の写真 6 葉がある。主として Prof. van Steenis など Leiden group, Prof. E. H. Corner (1st Royal Society Expedition) の Kew group の学者の成果などを取り入れた解説的なものである。岩槻・水谷 (May, 1963) の名も出る。最近では日本の他の植物学者の訪問（探検よりこの方が今では適当な表現かも知れない。）も多く、小林義雄 (May-June, 1966)、富樫 誠 (Sept.-Oct., 1966) 両氏も大きい成果をあげている際、このような文献で手軽に Kinabalu の記述を読むと楽しい。（津山 尚）

□津山 尚・二口善雄：日本椿集 (T. Tuyama & Y. Futakuchi: *Camellia cultivars of Japan*) B5 変型判 (18×23.5cm) pp. 467. (内 pls. color. 227) 平凡社 (東京) ¥7,800.

これは本年の最高といえる出版物である。解説者としての津山氏も、画家としての二口氏もともに土性骨のしっかりした人でしぶとい程の執念と凝り性とが一行の記述の中にも、一個の斑紋の中にもみえてこわい位だ。今までいくつかあったツバキの解説書など全くかすんでしまった、深い敬意と謝意とを表する。原種からはじめて各品種を各頁に 1 枚ずつ原寸原色に描かれた対頁に形態、沿革、異説等の解説がある。品種名は一々最初の出版年代を考証確認附記したがこれは園芸品種に対して恐らく最初の試みであろう。図の終りの方に数寄屋、佗助のような特別の品種を配置した外は、200 を越える品種が技変りのものから、単色、斑入り、紋りと覆輪、葉替わりと妍を競いあきることを知らない。印刷もよい。

本書の生命はこの図版とその解説との総合の上に立つ。しかしさらに巻末 40 頁の「椿の話」には、椿の品種の故郷染井村と伊藤伊兵衛、古代から現代にわたる椿と人間の交渉史、東亜におけるツバキの分化とその中での日本のツバキの位置についての津山氏の深い考証と思考が盛られていて圧巻である。小さいことのようにだが図版を二つ対照してみる便宜のために技折り用の打紐を二本とじ込んだのも大変親切である。結論として再

び繰りかえすが、これは本年の最高といえる出版物である。

(前川文夫)

□樹木と塩害 今年8月22日に颱風第14号が、浜松附近に上陸した際、新幹線の碍子が塩害を受けたという放送があった。颱風の際、強い風に乗った波しぶきは、沿岸から程遠からぬ土地に達して、樹木や種々の建造物に附着し、一旦乾くことはあっても、後日潮解するに及べば、害をなすことは当然である。

昨年9月17日の颱風第24号はこの日の夜渥美半島に上陸したので、東京からは遠距離であったが、規模が大きかったが為に、東京にも多少の損害を齎した。その翌朝早く、私は新幹線の臨時列車で、国体の為に高山市に向い、23日の夜帰宅する迄、連日の快晴に恵まれた。然しその翌24日は、雨こそ降らなかったが湿っぽい日で、薄日が時々当たった。25日の朝は小雨の尾瀬に行くため、早朝上野駅に行ったのに、信号機が塩害からの故障で、どの列車も発車出来ず、2時間近くおくれたので、沼田に着いたのは12時30分になってしまった。

10月になってようやく暇を得て、塩害の実態を見ることが出来た。最初に目をひいたのは、自庭内の大きなカツラの木の梢の葉がひどくいたんで形が変わり、且つ上部の枝は、可なり裸になっていたことである。次に近くにある靖国神社外園のイチョウを見ると、その南に巨大な建物のあるあたりのものは、殆んど被害が無いが、強風が直接当たると覚しいものでは、葉がひどく傷んでいることが判った。そこで、九段坂上の住宅公団の西側で、南北に並んで植えられたイチョウを見ると、南端のものは傷みが最もひどく、その蔭になったもの程傷み方が少ないことが判った。大分日を置いて、九段坂に街路樹として植えられたソメキヨシノを検したところ、葉はちぢんで衰れた状態であった。又坂の南側に列植されたイチョウの葉は概ね萎れ且つ落葉するものが多いし、牛ヶ淵にあるマテバシイの葉の先端や靖国神社外園内のモクセイも、同様な傷み方を見せた。11月に入って4日の観菊会の時にも、望遠レンズを装備したカメラを携えて、新宿御苑内のものを物色した結果、背の高いイイギリを始めとして、カエデのような落葉樹のみならず、南面して植えられたものなら、ヒヨクヒバのような木さえ、甚しく傷んでいることを確認した。

斯くする間に、神奈川県七里ヶ浜のクロマツが、塩害の為に皆枯れたという情報が入った。従って、海岸の防風林には、何を植える可きかが問題となったという。クロマツは元来暖帯の樹木であり、葉も強靱で潮風に耐えるとはいえ、高波のしぶきを孕んだ風には、流石に抗しかねたに相違ない。恐らくシイのような木でも葉は相当に傷むことであろう。この颱風の東京附近で最も激しい時間を知り度いと思ったが、気象庁には何も記録が無いという返事に、落胆を覚えた。

(武田久吉)